

上と、ことばの面の向上がめだつてゐる。また知的にのびたと考える者が少くない。

七番目の就学への準備は、教師ではそのことについていう母親のほうにしかあらわれなかつた。しかも、このなかには、幼稚園を特殊学校への準備校としてやくだつと考へる者があつたが、このことは、大きな問題である。

八番目の通園からくる効果は、ひとりで通園できるようになったとか、自分の子どもの欠点がはつきりつかめたというように、幼稚園保育の直接の効果というよりも、幼稚園へ通園することによって生じた間接的な効果をふくんでおり、これまでの七つの項目とは性質のちがつたものであるといえる。

そのおもな内容は、通園によつて道をあるく技術を習得したこと

家庭教育に幼稚園を利用できたこと、家庭生活の欠陥が幼稚園生活でおぎなえたこと、先生というものにたいする態度をおぼえたことと、子どもが幸福のように思えることなどである。

幼児の発達と保育期間との 関係（その一）

姫路工業大学

守屋光雄
釤宮冴子
高橋洋子

達にいかなる影響をもたらすであろうか。この点については、従来から、幼児教育の実践的課題として、採りあげられてきたことは多いのであるが、われわれもまた、現場における保育期間の長短が、いわゆる保育効果（経験効果）の優劣を、どのように規定しているかについての実態をさぐり、同時にそれらの資料に基づいた、より効果的な保育形態・内容が、いかなるものであるかについても追求して行きたい。したがつて、いわゆる保育効果についても、単なる保育期間のみの問題で終始するわけではなく、諸条件のからみあいの結果としてとらえられなければならないことはもちろんであるが、ここでは、もっぱらⅠ年保育とⅡ年保育の期間の差異のみに限定し、どこまでも実践面とのつながりにおいて検討して行きたいとおもう。

「研究の方法」

したがつて、このような保育期間の差異がもたらす効果の予測とは、厳密な意味においては、入園当初の資料に加えての卒園時測定値が比較されねばならないのであるが、換言すれば、入園時資料からみての卒園時再検査の結果が、どのようであるかについての手続きを経ていなければ、両者間の比較は極めて巨視的段階にとどまるざるをえないものであるが、今回はこのような方法論上の不備を認めながらも、卒園時のみの資料に基づいたことをお断わりしておく。

対象、姫路市双葉幼稚園、神戸市須磨幼稚園で、人員は両園合計したⅠ年保育児六一名Ⅱ年保育児五四名（とくに性別を設けず）とし、生活年令は五才〇か月より七才〇か月までとした。なな調査期間は昭和三十二年一月から三月まで。

以上について、Ⅰ年保育児、Ⅱ年保育児のグループ別に次の諸テストを施行した。すなわち①K式乳幼児発達検査（京都市児童院標

準化によるもの)を個人検査で行い、兩者間の $(\frac{D.A}{C.A} \times 100)$ を求め、(2)ついで諸種の体力検査(大崎さちえ氏標準化になるもの)を行ふと同時に、(3)牛島義友氏翻案による社会性能力検査用紙を配布せしめ、保育者、父兄両方の観察結果に基づく $S \cdot Q (\frac{S.A}{C.A} \times 100)$ を算出した。

「結果の考察」

まず発達検査の結果は [Fig. I] に示す通りであつて、(図表、その他は大会発表要旨に記載されてるので略す) これらの分布曲線は [Fig. I (2)] に認められる通り、D.Q. 100 を平均値として段階区分を設けており、I 年保育における頗る曲線からは、D.Q. 100 ～ 115 にかけて約 10% のアラートを有しているにかかわらず、II 年保育のそれは、D.Q. 100 をトップにその巾は狭く急激に下降している。しかも、D.Q. 100 ～ 110 の間で全体の 70% が含まれているのに反して、I 年保育の平均よりの脱逸は、II 年保育の中よりも広い。次にこれらの下位テスト間に示される通過率を求めたものが [Fig. II] であり、これらの通過率の示すところによれば、①両者共に殆どの項目に 80% 以上の通過率をみている点は、問題作製上の操作的な面があるとしても、より発達的な問題が予想されるのであるが、内容的なものとしては、②II 年保育が I 年保育に比較して、いわゆる動作性検査(たとえば、空間関係把握の下位検査であるブロック・デザイン、記憶問題におけるノックス・キューブなど)においては、やや優位で、③逆に言語的なもの(絵の絵画、短文複唱など)においては I 年保育が上回っているようである。

第三に、体力検査の結果を概観すると、[Fig. III (2)] より示された分布曲線 [Fig. III] に認められる通り、疾走・立巾跳においてはやや II 年保育が優れているようであるが、荷重疾走・懸垂・片脚連続跳

においては殆ど有意な差は認められない。

第四に [Fig. V] に示される S.Q. の分布からは、やや II 年保育の方が I 年保育よりも上廻るようである。したがつて、従来からいわれる通り、社会性の発達といわれるものが、その一要因として保育年限の長短との関連性でとらえられている点を、裏書きするものではなかろうか。

二年保育児に見られる傾向

附題

知能テストに見られる早生れ児と遅生れ児の差異について

神田寺幼稚園 中 村 徳 子
福 永 か り

一 まえがき

当園では創立以来七年間、地域の特長を考慮して三年保育を行つてきたが、保育が子どもたちに与える影響を科学的に把握し、また子供たちの状態を客観的にとらえなければならないことを痛感している。そこで三年保育児に見られる傾向を、毎年継続的にしかも手近かな問題をとらえて検討している。ここに述べるものその一端である。

今回は遅生れ児二十七名、早生れ児十七名を対象とし、三年保育の三才の春施行した乳幼児精神発達検査を、五才の時同一児童にまたび施行し、その間における両者の差の変化をテストの項目別に比較し、さらに日常保育の面とあわせて検討してみたのである。